

第四十四回クラウン全国吟詠コンクール課題詩（一）

<p>太平洋上 作有り（安達漢城）          日は浪より昇つて又波に沈む          海水洋々紫色多し          鵬影飛ばず鯤躍らざる          碧空万里白雲過ぐ</p>	<p>花を惜しむ（福沢諭吉）          半生の行路 苦辛の身          幾度か春を迎え 還春を送る          節物は 怨々として 留むれども止まず          花を惜しむ人は 是れ霜を戴くの人</p>	<p>子規を聞く（正岡子規）          一声 孤月の下          血に啼いて 聞くに堪えず          半夜空しく 枕を敬つ          古郷万里の雲</p>	<p>芳野懐古（梁川星巖）          今来古往事 茫茫          石馬声 無く 杯土荒る          春は 桜花に 入つて 満山白し          南朝の天子 御魂香し</p>
<p>長安主人の壁に題す（張謂）          世人交を結ぶに 黄金を須う          黄金多からざれば 交わり深からず          縦令然諾して 暫く相許すとも          終に是れ 悠悠たる 行路の心</p>	<p>半夜（良寛）          首を回らせば 五十有余年          人間の是非は 一夢の中          山房五月 黄梅の雨          半夜蕭々として 虚窓に 灑ぐ</p>	<p>豊公の旧宅に 寄題す（荻生徂徠）          海を絶るの 楼船 大明を 震わす          寧んぞ 知らん此の地 柴荆を 長せんとは          千山の 風雨 時々 悪しく          猶お 作す 当年 叱咤の 声</p>	<p>夜墨水を下る（服部南郭）          金竜 山畔 江月 浮ぶ          江揺ぎ 月湧いて 金竜 流る          扁舟 住まらず 天水の 如し          兩岸の 秋風 二州を下る</p>
<p>常盤孤を抱くの 図に 題す（梁川星巖）          雪は 笠檐に 灑いで 風袂を 捲く          呱呱乳を 覓むるは 若為の 情ぞ          他年 鉄枴 峰頭の 嶮          三軍を 叱咤するは 是れ 此の 声</p>	<p>舟大垣を 発し 桑名に 赴く（頼山陽）          蘇水 遙々 海に 入つて 流る          櫓声 雁語 郷愁を 帯ぶ          独り 天涯に 在つて 年暮れんと 欲す          一篷の 風雪 濃州を下る</p>	<p>漫述（佐久間象山）          誇る者は 汝の 誇るに 任せ          嗤つ者は 汝の 嗤つに 任せん          天公 本我を知る          他人の 知るを 覓めず</p>	<p>涼州詞（王翰）          葡萄の美酒 夜光の 杯          飲まん と 欲すれば 琵琶馬上に 催す          酔つて 沙場に 臥す 君笑つこと 莫かれ          古来 征戦 幾人か 回る</p>
<p>日本刀を 詠ず（徳川光圀）          蒼竜 猶お 未だ 雲霄に 昇らず          潜んで 神州 劍客の 腰に 在り          髯虜 塵に せん と 欲す 策無きに 非ず          容易に 汚す 勿れ 日本刀</p>	<p>舟由良港に 到る（吉村寅太郎）          首を 回らせば 蒼茫たり 浪速の 城          篷窓又 聴く 杜鵑の 声          丹心 一片 人知る や 否や          家郷を 夢みず 帝郷を 夢む</p>	<p>武蔵野を 讃う（土屋忠司）          武相の 連山 紫紅に 映え          富嶽 遙かに 望めば 雲 残照          噫 武蔵野 月雪花          古今の 墨客 感懐を 誌す</p>	<p>天の原（安部仲麻呂）          天の原 ぶりさけ 見れば 春日なる          三笠の 山に出でし 月かも          三笠の 山に出でし 月かも</p>
<p>花に対して 旧を 懐う（釈義堂）          紛々たる 世事 乱れて 麻の 如し          旧恨 新愁 只自ら 嗟く          春夢 醒め 来つて 人見え ず          暮檐 雨は 洒ぐ 紫荊の 花</p>	<p>富嶽（乃木希典）          峻嶒 たる 富嶽 千秋に 聳ゆ          赫灼 たる 朝暉 八洲を 照す          説くを 休めよ 区々 風物の 美          地霊 人傑 是れ 神州</p>	<p>夜坐（藤田東湖）          金風 颯々 群陰を 醸し          玉露 溥々 万林に 滴る          独坐 三更 天地 静かなり          一輪の 明月 丹心を 照らす</p>	<p>幾山川（若山牧水）          幾山川 越え 去り 行かば 淋しさの          はて なん国ぞ 今日 も 旅行く          幾山川 越え 去り 行かば 淋しさの          はて なん国ぞ 今日 も 旅行く</p>